

○研究あれこれ

北山非人・横行・細工―登場する被差別民―

奥本武裕

国立公文書館の内閣文庫に所蔵される大乘院文書の中に「御参宮雑々記」と題された記録がある。これは、文永2年(1265)12月、関白一条実経が奈良を訪れた際の様々なできごとを興福寺の賢舜という僧が書き留めた記録である。

一条実経は五摂家のひとつ一条家の祖で、関白、摂政をつとめていたが、兄である鎌倉幕府の前將軍一条頼経が鎌倉から逐われた事件に連座し、寛元5年(1247)に摂政を解任されていた。その後、文永2年閏4月に二度目の関白に就任しており、その報告のための春日社参詣であったのであろう。

賢舜は「御参宮雑々記」に、興福寺・春日社が京都から賓客を迎えるために路次の掃除、道や橋の修繕、宿所の整備などの準備をあわただしく進めていった様子を詳しく書き残している。

このうち掃除についてみれば、新薬師寺郷、南大門郷、東御門郷、北御門郷、穴口郷、西御門郷、不開御門郷の郷民たちに、それぞれ興福寺・春日社周辺の大掃除が分担して命じられている。そして、この大掃除に際して、郷民たちとは別に掃除を命じられた人々がいた。

「八幡伏拝」という場所から南へ延びる道と、西へ延びる道の不浄物などの「清目」が「北山非人」に命じられ、「逆野辺」の掃除を「横行并細工」が勤めていたのである。

「八幡伏拝」については、山城国久世郡にあった八幡伏拝がよく知られている。この八幡伏拝は石清水八幡宮の真東にあたり、鎌倉時代に奈良を訪れた公家たちがその途中に必ず立ち寄った場所であった。ただ、「御参宮雑々記」の他の部分の記述から、この場合の「八幡伏拝」は東大寺八幡社の伏拝堂をさしていることがわかり、北山非人はそこから南と西に延びる道の「清目」を命じられたのであった。

北山非人とは奈良町北方の丘陵地である北山にあった北山宿の非人たちのことである。文永2年より20年ほど以前、寛元2年(1244)には、彼らが京都清水坂の非人と諸国の非人宿の支配をめぐって激しい争論を繰り広げていたことや、文永6年(1269)には律宗の僧叡尊たちによって、北山非人への大規模な施行がおこなわれたことはよく知られている。

鎌倉時代の非人宿は、「癩者」や貧窮者と彼ら

を保護監督する立場の人々によって構成されていたと考えられている。興福寺・春日社はこうした北山非人を道路の「清目」に動員したのであった。

一方「逆野辺」とは、奈良町北方の般若寺坂下の般若野五三昧と呼ばれた墓地をさしていると考えられる。その清掃を勤めた「横行并細工」とはどのような人々であったのだろうか。

横行は室町時代には声聞師とも称され、曲舞などの芸能にたずさわる民間宗教者で、大乘院配下の五ヶ所・十座という声聞師の組織が存在していたことや、大和国内数十か所に声聞師が居住していたことが知られている。

一方、細工は室町時代には「穢多」「河原者」とも称された人々で、室町時代には大乘院に草履を献上したり、馬医をつとめたりした細工がいたことが知られており、後の被差別部落につながる人々であると考えられる。

「御参宮雑々記」は奈良町周辺の横行や細工に関わる現在知られている最も古い史料であるが、そこには、北山非人・横行・細工が、他の郷民たちとは明確に区別される存在として登場しているのである。「御参宮雑々記」の筆者賢舜は、自身はそうとは意識してはいなかったのだろうが、鎌倉時代の大和の被差別民について知ることのできる史料がきわめて少ない中で、大和の被差別民の歴史にとって興味深い事実を書き残していたのである。

(史料センター研修員)